

## 共同研究者所見

分科会番号(19) 分科会名( 学校図書館教育 )  
共同研究者名 ( 山口真也 )

2007 年度の学校図書館教育分科会では、「学校図書館教育をどう進めていくか？」というテーマの下で、八重山農林高等学校の山根頼子司書による運営、北山高等学校の手登根千鶴子司書の司会によって、各支部代表者の活動報告(南部、中部)と2本のレポート(北部、八重山)発表にもとづく討議が行われた。ここでは、レポート報告を中心に討議の様子と感想を述べたい。

今回のレポート、活動報告は各支部とも、学校司書の雇用身分に関わる問題をテーマとするものが中心であった。まず、上原健弘教諭による「八重山商工高等学校における学校図書館司書の位置付け」と題するレポートでは、八重山商工高等学校定時制課程における学校司書の配置問題が取り上げられた。八重山商工定時制課程では、今年度より、定時制での賃金雇用の学校司書の配置が廃止されており、フルタイムの司書が配置されている全日制と比較して、不平等な教育環境となっている。現在は、廃止前に勤務していた方が「ボランティア」として、貸出等のカウンター業務を担当してくれてはいるものの(1週間に3日、1日4時間ほど)、図書館司書という専門的職務を個人の好意に頼ることが望ましいのか、ということを目を問する日々であるという。

こうした状態に対して、参加者からは、ボランティアとして熱意をもって図書館運営に関わってくださる方がおられることは大変心強いが、県の服務規程の義務、罰則を科すことができない「外部」の人間が学校図書館のサービスに「単独」で関わることには法令上の問題があるのではないかと、という意見が多数寄せられた。八重山商工定時制課程では、管理職の許可の下でサービスを行うという態勢がとられているのだが、一般の図書館ボランティアとは異なって、専任職員の監督の下で、カウンター業務に従事しているわけではない。館内で事故が起こった場合どうするか、学校外部が児童生徒の個人情報(貸出記録を含む)に触れることに問題はないのか、といった不安もある。さらに、県の財政削減、評価導入の流れを考えれば、「ボランティアだけで学校図書館の運営を行った」という事実が一つの「成果」として認められ、他の定時制高校に広がっていく懸念も払拭できない。図書館サービスを低下させたくない、という学校側の気持ちは理解できるし、ボランティアの方の熱意も高く賞賛されるべきではあるものの、長期的に見れば、沖縄の学校図書館界にとっては問題のある対応であると言わざるを得ないだろう。参加者からは、一部の定時制学校において司書が引き揚げられる動きもあるが、それは全県的なものではないこと、管理職や地域との連携により、PTA 雇用や賃金雇用としての配置を復活させた学校もあることなどの助言があり、八重山商工定時制でも今後、関係者との協力態勢を築きながら、そうした取り組みに向けて努力していくことが確認された。

続く、北部支部(手登根千鶴子司書、知念未輪子司書)による「賃金職員配置に対する学校の取り組み」と題するレポートでは、県内の小規模校で加速している、「臨時雇用職員から賃金雇用職員への切り替え」についての問題点と、それを改善するための取り組みについて報告された。北部支部の一部の学校では、今年度より学校司書の雇用が、1日8時間のフルタイム雇用から、1週間35~38時間の時間雇用に切り替えられている。1週間あたりの雇用時間は数時間の削減ではあるが、フルタイム雇用と比較して、①給与が月額制ではないこと、②生徒に対する責任が不明確であること、③1人職場の学校図書館では他の司書と交流できる研修は貴重な情報交換の場であるが、研修参加権が認められていないこと(年休をとって参加しなければならず、交通費も支給されない、研修の通知もないこと)、④夏休みの雇用時間が削減されること、④勤務時間が開館時間とほぼ同じであり、貸出や授業対応などに終始し、分類、目録、排架、資料整備などのテクニカルな業務、行事準備に取り組む時間がないこと、⑤必然的に残業をせざるを得ない状況になっていることなど、多数の問題が報告された。また、北部支部ではこうした問題についてレポートをまとめ、賃金雇用職員では学校図書館の業務は担当できないこと、以前のように、臨時任用職員に戻してほしいという要望を県に対して行っており、今後の対応を見守っている状況であることが発表された。

こうした報告に対して、参加者からは、「人件費削減」という名の下で、個人の熱意に過度に依存する現在の

図書館行政に対する不満が次々に語られた。学校教育現場では、もともと個人の努力に過度に依存する体質があり、「残業は当然」、「時間通りに帰ると白い目で見られる」傾向があるものの、本務職員以外の職員に対してそうした期待が許されるとしても、それは「教育職」としての給与保障があることが前提となるだろう。学校司書は、教育的職務に従事するものの、給与体系は事務職と同一であり、教育職員のように、勤務時間外の取り組み(授業の準備、自己研鑽など)が給与に反映されることはない。そうした給与体系の下で、残業をしなければ、学校図書館の業務を全て担当できないような雇用のあり方は根本的に間違っている。人を大切にすることを謳う教育現場においてこのような問題が放置されることは決して許されるべきことではないだろう。

当日は、「賃金雇用職員は認められない、フルタイムの臨時雇用職員に戻して欲しい」という現実的な問題に絞って議論されたものの、学校司書の職務が専門性を問われるものであり、教育に関わる部分が大きいことを考えれば、フルタイム雇用、賃金雇用を問わず、1年単位での雇用では継続的な取り組みが極めて難しいという問題は依然として残ってしまう。やはり、学校図書館業務を担当する人員は、正規職員として配置していくという運動も必要となるだろう。

なお、参加者からは、この問題に関連して、「これまで沖縄の学校司書は自分たちの専門性をPRするのが上手ではなかったのではないか」という意見があったことも明記しておきたい。現在、教育現場では「成果主義」が導入されつつあるが、学校図書館については、「貸出冊数」によってその活動が評価されてしまう傾向にある。冊数が少ない学校でも、読書の広がりが見られる学校もあること、そもそも学校図書館は読書だけの場所ではないこと(読書も大切ではあるが)、授業支援の場として使われている事例も増えていること、レファレンスサービスを通じて学習支援機能を高めている学校もあることなど、様々な面から、「教育課程の展開に寄与する学校図書館」像をアピールしていく必要があるということも忘れてはならないだろう。

今回の研究集会では、共同研究者である山口と琉球大学教育学部において学校図書館司書教諭資格課程を担当されている望月道浩先生との共同研究として、「県内大学における学校図書館員養成の現状と課題」と題する発表を行う機会も得ることができた。2003年度からの司書教諭配置義務化以降、大学では司書教諭資格取得者が急増すると同時に、行財政改革を背景とする学校司書の臨時職化が進行していることから、司書教諭有資格者が「学校司書」として採用されるケースが続出しており、学校図書館現場から「司書教諭資格だけでは学校図書館の専門的職務を担いきれない」という問題が指摘されるようになってきている。現在の司書教諭課程は、元来、学校図書館と教員をつなぐことを第一の目的とするものであり、学校図書館の業務の全て(特に分類、目録、資料整備、環境整備、奉仕)に対応できるカリキュラムとはなっていない。1人職場の学校図書館において、その業務を全て担当するには、5科目10単位の授業では到底不十分であると考えられるのである。幸い、山口が所属する沖縄国際大学では、司書教諭資格課程の他に、図書館司書資格課程も設置されていることから、司書教諭資格取得者が学校司書として採用されることを想定して、司書資格課程の同時履修を推奨することが可能である。よって、2005年度以降、履修指導の見直しを進め、現在では、学校司書として必要となる知識を持った学校図書館員の養成に努めているが、司書、司書教諭、教職という3つの課程の履修を課すことについては、学生の負担が大きく、履修者が減少するという現象も確認されている。そこで、現場の学校司書の方々はどのような人員の育成を大学に対して求めるのか、ということを確認したところ、高校司書の方針としては、「学校図書館には専任司書教諭の配置が必要であるという運動方針の下で、司書資格と司書教諭資格を持っている人員を配置して欲しいと県に要請している」とのことであり、現在の沖縄国際大学の取り組みを評価する意見が多数を占めた。ただし、学校内には、学校図書館が教育課程の展開に役立つということを意識していない教員が多いことも事実であり、教員志望の学生に対して、学校図書館の働きについてしっかり教育して欲しいという意見も多数寄せられている。大学の教職課程との連携により、学校図書館教育の場を設けることが急務と言えるだろう。

研究集会では、この他にも、学校司書の校務分掌上の位置づけが曖昧であること、図書館行事への生徒の関心が低いこと、係教諭との連携が不十分であること、司書教諭有資格者が少ないためか、係教諭と司書教諭が同一人物ではなく、学校図書館運営に支障を来していることなど、様々な観点から、現代の沖縄県の学校図書館が抱える問題が報告、議論された。スペースに限りがあるため、その全てをここで紹介することはできないが、学校図書館現場での活動を知ることができ、大変有意義な集まりであった。勉強不足な共同研究者ではあるが、来年度もぜひ参加し、現場の声を拝聴する機会を頂きたいと考えている。(2007年11月11日)